

2019年度山梨県立大学地域研究交流センター
共同研究 研究成果報告書

研究テーマ

山梨県の小学校英語教育のさらなる充実を目指す研究

研究代表者	高野 美千代	(国際政策学部・准教授)
共同研究者	池田 充裕	(人間福祉学部・教授)
	Rhonda Tezuka	(甲州市 ALT)
	Peter Mountford	(国際政策学部・講師)
	伊藤 ゆかり	(国際政策学部・准教授)
	志村 通江	(市川小学校・教諭)

令和2年3月

「山梨県の小学校英語教育のさらなる充実を目指す研究」への取り組みにあたって

本プロジェクトでは、小学校教諭を対象とする英語教育セミナーの開催に加えて、これまで作成してきた小学校英語教育現場にふさわしい地域教材の研究を中心に行い、小学校英語教育のサポートに関連した研究を進めていくこととした。講座には外部講師を招き、本プロジェクトメンバーも自身の研鑽のために同席するという形を取った。小学校教員とALTを対象にした講座には、現場で求められている実践的な教授法を中心とした内容を心がけた。新規採択される英語科の教科書の研究を開始し、将来的には現場の教員に対して使用法を助言できるような準備を整えることとした。また、本プロジェクトメンバーが過去に作成した教材の有効利用のために検討を行い、現場での使用を促すためのサポートを行うこととした。

本報告書には「山梨県の小学校英語教育のさらなる充実を目指す研究」の計画と主な内容そして研究成果としての考察をまとめた。

研究代表者 高野 美千代

1. 研究の目的と概要

1 研究テーマ 山梨県の小学校英語教育のさらなる充実を目指す研究

2 研究テーマの内容

2020年度に全面実施される次期学習指導要領で、小学校では英語が教科化される。一部の小学校ではすでに英語の授業が先行実施されているが、すべての学校において評価を伴う英語教育が必須となる。5・6年生を対象に年間35時間行われてきた「聞く」「話す」を中心とする英語教育は、今後3・4年生に前倒して実施されることになる。一方の5・6年生に対しては「読む」「書く」スキルの育成も取り入れた教育がこれまでの2倍となる年間70時間導入されることになっている。

文科省の方針に従った小学校英語教育を首尾よく進め、児童や地域社会の要望に応えることが小学校英語教育現場における最大かつ喫緊の課題である。そのために、①現場のニーズに合った内容の教員研修プログラムを研究構築し、セミナー・ワークショップの形式で提供すること、②子どもたちが英語を「楽しく」学べ、かつ、時代と地域の要請にこたえる素材を扱う英語学習教材を作成したので、それを提供して、教育現場での活用方法を研究すること、この2点を本プロジェクトの柱とする。

3 研究の方法と手順

小学校英語指導者を対象とする研修プログラムを研究・構築し、小学校教諭のためのセミナーおよびワークショップを開催する。小学校英語教育現場では、多くの場合、日本人クラス担任と、ALTなどの英語教員がペアで教えること（チーム・ティーチング）が求められているのだが、このことは、英語教育の経験が乏しい日本人教師にとって非常に困難な要素になっている。本プロジェクトでは、2名のゲスト講師を招聘して、まさに理想的なチーム・ティーチングの実例を示していただき、山梨県の

小学校教諭にとって非常にまれな、貴重な学びの機会を提供することとした。

2. 研究の主な内容

2-1. 小学校教員対象研修プログラム

本プロジェクトの柱の一つである小学校教諭対象の英語研修会を2度開催した。効果的な研修セミナーとなるように、現場教員が直面する課題を分析し、講座内容を検討することとした。基本的に英語に触れる機会が少ない小学校教諭が、英語に慣れ、さらに気軽にアクティビティを取り入れることができるように、セミナー内容を工夫することとした。対象は、日本人教員だけでなく、実際に現場で教育に携わるALTを含めることを念頭に置いた。理由は、令和2年度より授業内でのチーム・ティーチングがさらに増加することが予測されたためである。具体的には第1回目を次の要領で計画した。

日時：2019年11月16日（土）午前10時～午後3時

場所：山梨県立大学飯田キャンパス C 館 102 教室

講師：Brian Byrd 先生、藤原真知子先生（聖学院大学、聖学院小学校講師）

講座内容：①短時間でできるアクティビティの紹介（手遊び、スキット）、②CLILによる教授法紹介（おにぎりづくり、朝顔の栽培、地図作りなど）、③教材 Yamanashi Cards の説明と使い方

理科、社会科、家庭科の学習内容を取り入れた英語活動については、参加者の要望に十分に対応するものであった。また、子どもが楽しみながら英語を学べるゲームや遊びなどを導入する方法について細かなアドバイスが講師から参加者に伝えられた。

第2回目は以下の通り実施した。内容は非常に充実したものとなった。

日時：2020年1月25日（土）午前10時～午後3時

場所：山梨県立大学飯田キャンパス C 館 102 教室

講師：藤原真知子先生、Brian Byrd 先生（聖学院大学、聖学院小学校講師）

講座内容：①ウォーミングアップとしての活動例（ゲームなど）、②日本文化を伝える活動の紹介（寿司を用いたチャンツ、ダイアログ、ゲームなど）、③異文化理解のための活動、④ディスカッション（新しい教科書の内容確認を含む）

2-2. 考察・意見

以下、今年度の研究活動の成果として、本研究プロジェクトメンバーによる考察を掲載する。掲載順は、池田充裕山梨県立大学教授、伊藤ゆかり山梨県立大学准教授、Rhonda Tezuka 氏、志村通江氏、高野美千代である。

山梨県内における小学校「外国語科」の授業に対する教員の意識調査について

池田 充裕・内藤 さやか
(人間福祉学部人間形成学科)

はじめに

2020(令和2)年度から次期小学校学習指導要領が全面実施となり、小学校での英語教育は大きな変革期を迎えることになる。これまで高学年の5・6年で行われていた「外国語活動」は中学年の3・4年に移動し、その目標は、『聞くこと』、『話すこと [やり取り]』、『話すこと [発表]』の三つの領域を設定し、音声面を中心とした外国語を用いたコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成(平成29年告示『小学校学習指導要領 外国語活動・外国語編』8頁)することと規定された。その上で、高学年の5・6年では、外国語活動で育まれた三つの領域に、『読むこと』、『書くこと』を加えた教科として外国語科を導入し、五つの領域の言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成(同8頁)することが目指されることとなった。

それでは、実際に授業を担当する小学校教諭は、どのような意識や心構えを持って、この変革を受け入れようとしているのだろうか?

本稿では、筆者がゼミ指導を行った人間形成学科4年(当時)の内藤さやか氏の卒業研究論文「小学校における英語教育と中学校との連携について」において実施した山梨県内の小学校教員に対する意識調査の結果の一部を紹介したい。この調査では、2017年9月に、小学校外国語教育の研究指定校であったA校の教員17名と一般校のC校の教員27名、計44名から回答を得て、両校での教員の意識の比較分析を行った。本稿では内藤氏の調査の中から、特に「外国語科」の導入・実施に関する以下3つの項目を取り上げて、その概要を紹介したい。

(1) 「外国語科」を担当する上での不安な事項

外国語科を担当する上で不安があるか尋ねたところ、研究指定校であるA小学校では「とてもある」「少しある」と回答した割合は65%であり、「全くない」「あまりない」と回答した割合は35%であった。一方で、C小学校は、「とてもある」「少しある」と回答した割合は100%であった。A小学校では、2017年度から既に5・6年生で外国語科が導入されており、実際に指導した教員がいることの実験が自信に繋がっているのではないかと考えられる。

それでは、具体的にどのような事項について、不安を感じているのだろうか?図1の通り、A、C小学校共に、「自身の英語力」の割合が一番高く、続いて「指導方法が難しい」「教材準備時間の不足」の割合が高かった。A小学校に関しては、C小学校と比べて、「個々の児童の英語に対する興味・関心や理解度の差が大きい」という児童間の差を指摘する割合も高い。これまでの外国語活動では、ゲームやクイズ、チャンツなど楽しみながら英語を学習する機会が多く、児童は会

話を中心に活動を通して学ぶことができた。しかし、外国語科では「読むこと」、「書くこと」の領域が増え、単語の習得や文構造への気付きなど、言語能力向上の観点から言葉の仕組みを学習することになる。A小学校では英語学習が高度化するにつれて、英語の習い事をしている児童と初めて学習する児童との差が大きく見られるようになり、それゆえに“英語嫌い”の早期化が懸念されているのではないかと考えられる。その他では、「思考を要する授業が難しい」という意見があった。

またC小学校では、A小学校に比べ「教材準備時間の不足」「ALTとの連携が困難」との回答の割合も高い。既に実践経験のあるA小学校では教材研究の蓄積があるのに比べて、C小学校では新教科である外国語科について、十分な教材研究の時間を取ることができるのが懸念されているようである。また、A小学校にはALTが常勤配置されているが、C小学校では週2回程度の巡回方式での勤務であるため、打ち合わせの時間がなかなか取れない現状も伺える。

(2) 「外国語科」の授業において重要だと考えること

図2の通り、C小学校では「正しい英語の知識・技能・発音を児童に習得させる」「児童の興味・関心を引き出す教材を用いる」、A小学校では「活動的・体験的な授業づくりを心掛ける」「日常的に英語を用いる」の割合が高かった。

C小学校では、外国語科に対して、教科書を使い文字練習などを行うという「読むこと」や「書くこと」が強く意識されている一方で、ゲームなどを用いた従来の外国語活動での指導をイメージしているとも推察される。A小学校は、外国語科であっても単に英語の知識を習得する教科

と捉えずに、児童が英語を使う楽しさや魅力を体験を通して学ぶことを意識し、また日常から他教科や学級生活において英語を用いることを重視しているようである。このように、両校では外国語科の授業に対しても、指導にあたっての方針や方法について違いが見られた。

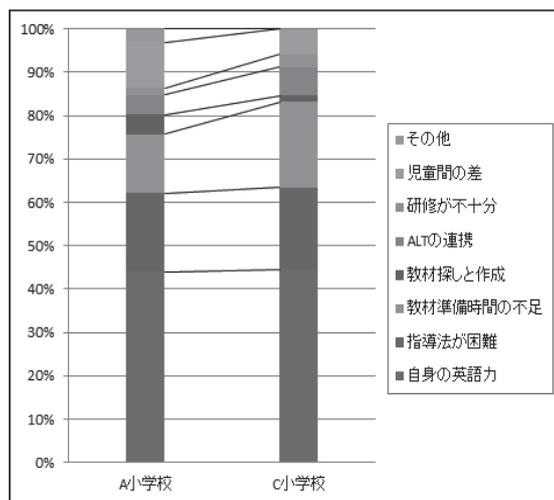


図1. 外国語科を担当する上での具体的な不安事項

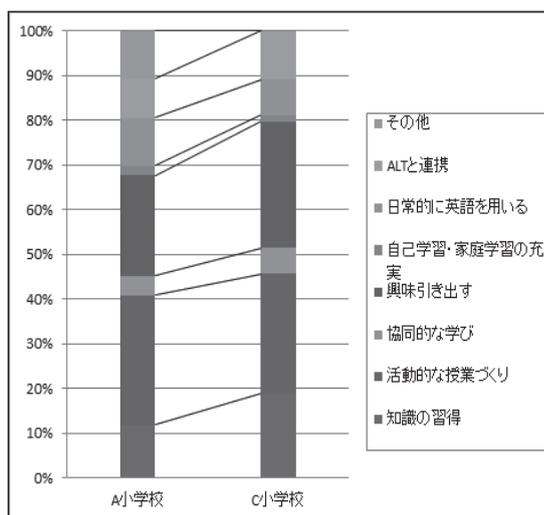


図2. 外国語科の授業を行う上で重要だと考えること

(3) 「外国語活動」や「外国語科」など、小学校で英語教育を実施・運営していくために、学校や教育委員会に支援してほしいこと

A 小学校では、「校内教員による研修会」「校内研修会の開催」「教育委員会や総合教育センターによる研修会」といった研修会参加への希望が強く、また「英語専科教員の常勤配置」や「効果的な授業実践例などの情報提供」を希望する割合も高かった。研修会や英語専科教員から、効果的・実践的なスキルを自ら修得し、授業を行いたいとの意向が強いようである。

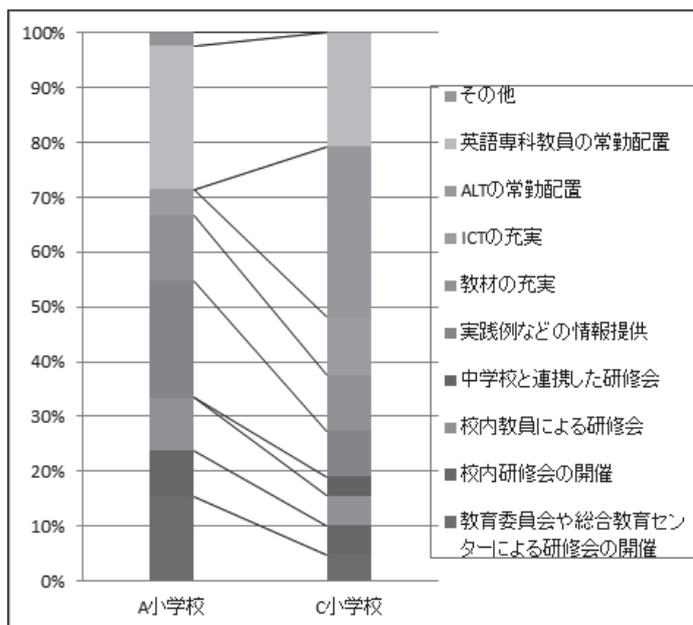


図3. 学校や教育委員会に支援してほしいこと

C小学校では、「英語専科教員の常勤配置」とともに、A小学校では既に実現している「ALTの常勤配置」への要望が多かった。英語専科教員やALTによるサポートを期待し、互いに協力して授業を行いたいと考える教員が多いようである。

おわりに

内藤氏の調査から既に2年が経っており、この間、総合教育センター等での学外研修や校内研修なども進み、教員の意識や現場の準備状況も変化していると思われる。しかし来年度からの正式の実施に向けて、特に外国語科の開始年次となる5学年の担任教員の負担を懸念する声は、現場からも多く聞かれる。外国語科や外国語活動の授業は学級担任が主導となって行うわけだが、その授業実践力を高めるためには、より実践的な校内研修の実施などが必要となるだろう。高学年での教科担任制の導入も検討されているところでもあり、より児童に充実した授業が提供できるように、外国語（英語）科の教諭免許を持っている専科教員の採用・配置や、小学校の英語教育の研修等を行っている大学等の外部機関やNPO法人との連携も積極的に検討していくべきである。

※本稿の執筆にあたっては、内藤さやか氏から卒業研究論文の概要の紹介を行うことへの承諾を得て、本稿の内容についても、チェック・推敲をいただきました。

英語劇ワークショップを実施して

国際政策学部 国際コミュニケーション学科

伊藤ゆかり

1. 専門分野を活かした英語教育

筆者が小学校英語教育と関わるようになったのは、2012年度に本センターの共同研究「山梨県内の小学校英語教育における指導者の養成と研修に関する研究」に参加した時が最初である。以降、数年にわたり、小学校英語の充実のためのセンター共同研究に携わり、高野美千代准教授およびブライアン・バード先生、藤原真知子先生による実践から多くを学んできた。また、2013年度以来本学における免許更新講習の「外国語活動」講師を務めている。

これまでの実践をとおして、小・中・高における英語教育の課題に対する理解不足を痛感することも多く、その充実のために何ができるか未だ手探りではあるが、重点をおいてきたのは、専門分野である戯曲・演劇研究を英語教育に活かすことである。2014年度の地域交流研究センター報告書において、「演劇的要素の活用による小学校英語の可能性」と題した小文を寄せた。本稿では、2018年度および2019年度の免許更新講習において行った英語劇ワークショップでの経験から学んだことを中心に振り返りたい。

2. 英語劇ワークショップの内容

2018年度の免許更新講習は「英語教育における小中連携の充実を目指す講座」、2019年度は「英語教育強化に対応する英語指導力の向上を目指す講座」というタイトルで開催された。受講生は、小学校教員を中心に、中学校教員、教員経験者などであった。

はじめに、英語劇を外国語活動の授業で実施するにあたっての留意点を中心に講義を行った。英語を学ぶことを目的とした授業における劇である以上、時間や人数、場所など、多くの制約がある。しかし、それを逆手にとり、さまざまなアイデアを試すことで、楽しく劇作りができることを強調した。たとえば、生徒数によっては、セリフを言う者と、体を動かす者とに分けることで2人の生徒がひとつの役を演じたり、語り手役を作るといった配役が可能である。さらに、教室全体を舞台としたり、観客を劇に参加させることのおもしろさを指摘した。講義の最後には、英語劇にしやすい物語と脚本を紹介し、休憩後に2グループに分かれて、作品を選び、10分程度の劇を作るように伝えた。その際、対象学年が中学生でもよいこと、物語や脚本に手を加えたり、登場人物も変えてよいし、いずれの脚本も用いないで創作をしてもよいと説明した。

紹介した作品は、「狼と少年」(“The Boy Who Cried Wolf”)と「三匹のくま」(“Goldilocks and The Three Bears”)、そして山梨県の民話である。筋がわかりやすく、だれもが知っている民話や寓話は、英語教材としてさまざまな活用が可能である。ここで用いた「狼と少年」は、ア

アメリカの小学校教科書に載っていたもので、学校で上演しやすいように原作よりも登場人物を増やし、結末を変えた脚本となっている。「三匹のくま」は、昔話をチャントによる脚本にしたもので、*Jazz Chant Fairy Tales* (1988) から取った。山梨の民話については、高野准教授が作成した *Yamanashi Folktales for Drama* (2015) と *Little Gems of Yamanashi* (2017) を用いた。英語で書かれた山梨県の民話を集めた小冊子で、前者は劇の脚本として書かれ、後者は物語を集めたものである。2018年度は「善光寺の棟木」(“The Ridgepole of Zenkoji”)、2019年度は「ダンスの中の田んぼ」(“The Magic Drawers”) のコピーを渡した。センター共同研究をとおして、地域の特色を生かした学習の重要性を学んだことから、これらの民話を選んだ。

各グループの人数は3~6人となり、2018年度は「狼と少年」を選んだグループと、いくつかの民話を用いて一つの劇を創作したグループに分かれた。2019年度は、2グループとも「ダンスの中の田んぼ」を選んだ。

3. 受講者による英語劇から学んだこと

受講生が劇を作る過程を観察し、発表を見て、最も強く感じたことは劇を作ることとそれを見ることの楽しさである。筆者は、本学の教養教育科目において自己表現の授業を長年担当した。そのなかで学生たちが独自の発想を活かして作り上げた劇を見る時と同じ楽しさを、このワークショップでも見出すことができた。英語学習というより劇作りを楽しめることが英語劇の効果の一つであることをあらためて感じた。

筆者の講義をふまえて、受講生たちは、脚本にとらわれず、いろいろなアイデアが詰まった劇を作り上げた。2018年の創作劇のグループは、「赤ずきん」や「シンデレラ」などを用い、単純な昔話を組み合わせることで複雑な劇ができることを示した。2019年の2グループに関しては、時々混じる日本語のセリフが効果的で、山梨の民話ならではの方言の活用だった。

ワークショップを通じてもう一つ学んだことは、演じる人々の英語力と個性を生かすことの重要性である。受講生の英語力にはばらつきが見られたが、中学校の英語教員が中心となってセリフを作る、英語に苦手意識がある受講生は英語と山梨の方言を混ぜながら話すなど、うまく役割分担をすることで、和気あいあいとしたワークショップとなった。

以上述べたように、講師という立場を越えて英語劇を楽しむことができたが、この実践をどのように活かすかという課題が筆者には残された。2020年度は英語劇ワークショップを実施する予定がないため、大学における教養教育科目の「総合英語」の授業に活かしたい。たとえば、英語の授業でしばしば行う道順を説明する練習において、観光案内所の案内係、観光客という役を与えて会話を行うといった方法が考えられる。英語劇には及ばないが、学生が役を楽しむような会話練習を見つきたい。

子どもに英語を教えるときのヒント

手塚ロンダ

1. 自信を持って教えること

教える側の緊張や自信のなさは、教わる子どもたちに伝わる。クラスを引っ張るように、落ち着いて、しっかりとした発声で指導を。

2. 積極的にクラスルームイングリッシュを使う

ごく簡単な表現で構わないので、取り入れること。繰り返すことが大事。

3. ジェスチャー、体の動きを使う

教師がジェスチャーを使うと子どもの注意を引くことができる。言葉だけよりも記憶しやすい。歌のときは子どもたちを起立させて練習、ゲームでは拍手をさせるなど。

4. 子どもの可能性を信じること

できないと決めつけないことが大事。やらせてみると非常によくできる。子どもたちも自信を持つようになる。

5. おもしろく教える

たとえば、小文字の“i”ならイチマルくん、女性代名詞“she”はシオリさん、男性“he”ならヒロキさん、のように日本語と関連させるなど工夫して楽しく覚えさせる。

6. ゲームなどのアクティビティは簡単なものでもまずはやり方を示す

丁寧に指示を行い、これから何をするのか理解させるのが大切。一度やって見せるのもよい。あらかじめ必要な語彙を教えておく。日本語で説明を補うことはかまわない。

7. 日本語にない音を正しく覚えさせる

単語の終わりの子音に注意。“red”は「レド」ではないことに気付かせる。“l” “m” “n” “r” など特に丁寧に教える。

8. 単数、複数、冠詞も取り入れて正しい文法を

あいまいにしないこと。まずは単数で、冠詞をつけて、つぎに複数を取り入れる。

9. 子どものほうに顔を向ける

黒板に向かわず顔は子どものほうに。口元をよく見せること。

小学校における Yamanashi Cards の活用例報告

志村 通江 (市川小学校)

2019年11月より、Yamanashi Cards* の活用方法を検討し、小学校英語教育現場で指導に取り入れた実例を以下に報告する。

大きなカード (A4判) の活用例

① 朝の15分間ほどを使った英語活動において

4、5、6年生を対象に、カードを見せながらアルファベットとフォニックスの練習を行った。子どもたちが全員でリピートできるまでにした後、子どもたち自身がカードを利用して個別に練習を行った。

② 山梨の名産を知る

カードの表側に、山梨の名所・名物などの写真やイラストがあるので、児童の興味をひいた。

③ 外国語の授業における CLIL (内容言語統合型学習) の試み

4年生の社会科の単元「私たちの山梨」と関連させた学習を取り入れた。拡大地図を使って山梨の各地域の名産となる食べ物を知り、外国語の授業で練習していた“**What do you want?**”の表現を使って、欲しい食べ物をもらうやり取りをする活動を行った。その活動の導入時にカードを使い、英語のやり取りに必要な語彙を覚えさせることができた。

小さいカード (A6判) の活用例

4、5、6年生を対象にした朝の活動で、カードを使って、カルタと神経衰弱を行った。

カードを使用した感想

カード表面のアルファベット及び英単語をマスターしたら、カード裏面に記された英語の説明やコメントなどを学習に取り入れることもできる。特に高学年の児童には、より詳しい英語表現の練習にも使えると思われる。

小さなカードをカルタのように並べさせ、アルファベットや単語を読み上げ、読まれた取り札を取る活動を行った。英語を使って山梨の名所・名物を知ることができ、子どもたちは繰り返しを通して英単語を自然に覚えることができた。

*このカードは2018年度山梨県立大学の地域研究プロジェクトにおいて作成された英語学習用教材。アルファベット順に山梨の名所・名物を紹介。表面にはアルファベット大文字・小文字と写真あるいはイラスト、それらの簡単な説明となる英語表現が裏面に印刷されている。様々な用途が考えられる。教師用はA4判、児童用はA6判。

小学校英語教科書を考える

高野 美千代

(山梨県立大学国際政策学部)

はじめに

2020（令和2）年度より小学校で5、6年生を対象に英語が教科化されるのに伴い、2019（令和元）年度、教科書の選定が実施された。東書、開隆堂、学図、三省堂、教出、光村、啓林館の計7社が発行する教科書のうちから、山梨県内の小学校が使用することを決めたのは東書と光村の教科書である。本考察においては、初の小学校英語教科書の例を挙げてその特徴を分析する。とくに小中の接続を円滑に行う工夫に焦点を当て、それを踏まえて有効な指導方法を提案することを試みる。

1. 教科としての小学校英語の目標

初めての小学校英語科の教科書は学習指導要領における教科・分野の目標等に基づいて作成されている。小学校学習指導要領解説の外国語編、第1章総説、2外国語科導入の趣旨と要点(1)外国語科導入の趣旨には、外国語科の導入に関して、これまでの成果と課題を踏まえて行われた改善点がつぎのように挙げられている。

- ・ グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。
- ・ 平成20年改訂の学習指導要領は、小・中・高等学校で一貫した外国語教育を実施することにより、外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度や、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする力を身に付けさせることを目標として掲げ、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」などを総合的に育成することをねらいとして改訂され、様々な取組を通じて指導の充実が図られてきた。
- ・ 小学校では、平成23年度から高学年において外国語活動が導入され、その充実により、児童の高い学習意欲、中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている。一方で、①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない、②日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある、③高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められることなどが課題として指摘されている。
- ・ また、小学校から各学校段階における指導改善による成果が認められるものの、学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や、学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができないといった状況も見られている。
- ・ こうした成果と課題を踏まえて、今回の改訂では、小学校中学年から外国語活動を導入し、「聞くこと」、「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」、「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることを重視することとしている。（下線部筆者）
(小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編、62-63頁）

新たに作成され、検定を受けた教科書は、そのすべてが特に下線を施した上の課題を解決する内

容であることが前提である。

これまでの「聞くこと」「話すこと」に加えて、「読むこと」と「書くこと」が英語学習に導入されるのが、今回の教科化における最大の変化とみなすことができる。このことは、総合的な英語力を身に付けるためであり、かつ、中学校へのより円滑な接続を図るために実施されるものである。

2. 教科書の具体的比較

山梨県内の公立中学校では、東書、開隆堂、光村の教科書が主に使用されている。東書は2019年（令和元年）度まで使用される教材『We can!』および『Hi, Friends!』を発行した。開隆堂は小学校に外国語活動が導入された時点で使用された「英語ノート」を発行した出版社である。東部富士地域等の公立中学校で採用している英語教科書の発行者である光村をこれに加えて、紙幅の制限のため、本稿では以上3社の教科書についての比較検討を行う。各都道府県教育委員会では教科書採択を検討するための資料を提供しているため、山梨県及び東京都による資料を一部参照しながら比較検討を進める。まず、東京都教育委員会による「令和2～5年度使用教科書調査研究資料（小学校）」ⁱ から、3社の教科書に盛り込まれた活動内容を比較する。なお次の表は同資料13. 英語「別紙1」【(1) 内容 ア調査研究の総括表】（小学校英語）より抜粋している。

項目 発行者	a 「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」の五つの領域別に設定されている活動の数						b チャンツ・歌の数	c ゲームの数	d 巻末または別冊の語彙リストに掲載されている語の数	
	聞くこと	読むこと	話すこと [やり取り]	話すこと [発表]	書くこと	計			索引形式	テーマごとの一覧表形式
東書	136	106	151	18	100	511	42	20	575	662
開隆堂	116	35	49	28	48	276	58	40	665	
光村	40	15	28	26	36	145	49	38		592
全7種の平均値	104.7	40.9	60.3	34.1	46.0	286.0	49.4	19.0	620.0	530.7

※ 平均値は、項目ごとの各発行者の平均を小数第二位で四捨五入した値を示している。

a 「聞くこと」「読むこと」「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」「書くこと」のそれぞれの領域を扱うために設定されている活動の数を、教科書に示されているマークによりカウントした。(ただし、「読んで書く」のように二つの領域を扱っている場合は、「読むこと」と「書くこと」の両方の領域の活動として、それぞれカウントした。)

b 音声十分に慣れ親しませたり、文字には名称と音があることに気付かせたりするために設定されている活動（チャンツ・歌）の数を、マーク等によりカウントした。

c 言語活動を行うために必要な語彙や表現等を定着させるために設定されている活動（ゲーム）の数をカウントした（「～ゲーム」「～クイズ」と明記されているもの）。

d 巻末又は別冊の語彙リストに掲載されている語の数をカウントした（ただし、異学年で同ジャンルの中に同じ語が扱われている場合や、人名は除いてカウントした）。

項目 a の 5 つの領域に設定された活動数において、東書は「話すこと（発表）」以外の数が平均を大きく上回っている。細かな活動が用意されていることがうかがえる。開隆堂についてはすべての領域において活動数はほぼ平均に近く、バランスに配慮した構成となっている。光村は活動の総数においては少ない値が出ているが、各領域のバランスが整っている。項目 b のチャンツ・うたの数は開隆堂が平均を上回り、光村はほぼ平均的な数となっている。項目 c ゲームの数について

では東書が平均的である一方で、開隆堂と光村がその約2倍含まれている。項目dの語の数においてはほぼ変わらず、その他（学図、三省堂、教出、啓林館）の教科書が扱う単語数を上回っている。

2-1. 東書 New Horizon Elementary の特徴

東書の教科書の特徴として、音声面の技能習得に効果が高いチャンツと歌が豊富であることをまず挙げたい。教科書は8のユニットから構成されている。ゲームこそ少ないが、チャンツと歌で子どもたちは十分に授業を楽しめると期待できる。しかも、チャンツは重要な表現を扱っていて、有意義である。たとえば、5年生用のユニット1に出てくる“**How do you spell your name?**”（「お名前はどのようにつづりますか」）という文は、汎用性の高い表現であり、実用的である。また、人名に限らず、英語の単語は、聞いた通りのつづりとは限らないので、スペリングを確認して正しく覚えるということは英語学習において重要となる。おさえておきたい英語表現といえる。ユニット2に出ている“**What sport do you like?**”（「何のスポーツが好きですか」）にしても、“**How do you spell your name?**”と同じように、応用がきき、実生活で頻繁に使うことができる表現である。“**sport**”の部分を入れ替えれば様々な質問ができる。ただし、5年生の教科書の冒頭部分でこれらが出てくることで、難易度の高さが気になるころではある。教え方次第で子どもの英語運用能力の向上が大いに期待できる。

歌はチャンツと同様に、英語のリズムに慣れ、身に付けるために非常に有用である。5・6年生のクラスでは、自意識の芽生えもあって子どもたちが歌をあまり歌いたがらない年齢となっているため、学習効果が期待できるレベルまで子どもたちに十分に歌になじませるのは難しいかもしれない。したがって、様々な子どもの好みに合わせて、単なる言葉遊びといったものから、より抽象的な内容の歌詞のついたものまで、あるいはテンポの速いものからゆっくりとしたものまで、取り混ぜて用意されることが望まれる。New Horizon Elementary では各ユニット1曲ずつの歌が含まれている。音程の問題は別として、歌詞の中の言葉の選択は豊富で、楽しめるものと言うことができる。オリジナル作品の数が多い。

各ユニットの“**Over the Horizon**”というセクションでは、世界各地の地域や人々の生活文化が紹介される。国際理解という観点から非常に重要ではあるが、使用されている英語は小学生にとって容易に理解できるレベルだとは考えにくい。どこまで子どもたちに理解させることを目標にするのか、判断が難しいのではないかと推測される。英語教育に慣れていないクラスルームティーチャーが教える場合にはとくに困難であることが推測される。編修趣意書にも示されているが、このセクションは教室で取り入れるよりもむしろ家庭や総合的な学習の時間あるいは課外授業などで活用するのに向いていると考える。

2-2. 開隆堂 Junior Sunshine の特徴

チャンツ・歌に関しては東書と同じく各ユニットに含まれている。歌は5年生で習ったものを再度6年生の段階で扱い、繰り返し学習できるように同じものが取り込まれている。一般によく知られた歌も含まれている。

ゲームも同じく頻繁に取り入れられている。とくに5年生では児童英語教育で使われる主要なゲームはすべて網羅するような形で導入されている。従前の小学校英語教育を基本的には踏襲するという方針がうかがえる。

2-3. 光村 Here We Go! の特徴

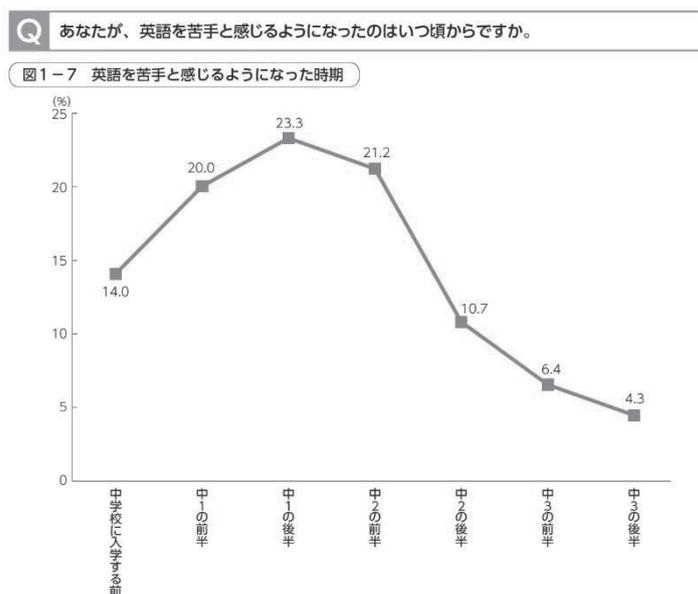
重要表現を練習することができるチャンツが種類豊富に用意されている。歌については、一般によく知られた子どもの歌が複数含まれている。たとえば“Pease Porridge Hot”や“it's a Small World”などは幼児の頃からなじみがある子どもも多いと思われる。音声を先に身に付けさせることに重点を置いている。まずは聴いて、それから口に出し、より複雑な表現を聞いたり話したりさせる。そのうえで、慣れ親しんだ言葉を読み、書くという行為に発展させるという言語習得のステップを踏んでいる。インプットは音声だけでなく映像を多く使用するという点でも、子どもの興味を持続させることに効果があると考えられることができる。

3. 円滑な小中接続のための指導方法

小学校英語科では新たに読むこと、書くことの指導が導入される。これによって、中1でのつまづきを減らすことが期待される。各教科書でも4技能すべてを網羅するように構成されているのは言うまでもない。

3-1. 小中接続が重要な理由

2018年にベネッセ教育研究所により実施された中3生1,003名に対する英語学習の意識調査の結果、英語が苦手だという子どもたち（全体の48.4%）が、中学に入学して間もなく英語に対して苦手意識を持ったことがわかった。



この調査結果が示していることは、まず、中学入学以前に英語に対して苦手意識を持つ生徒が少なからずいたのであるが、その後中学に入学してまもなく英語が苦手だと意識する生徒が急増し、中学2年前半までがピークとなっている。小中接続が重視されるべきであるのは言うまでもない。

3-2. 読むこと、書くことの指導

教科書の編修趣意書にも明らかなように、いずれの発行者も四技能の育成に十分な配慮をしているが、とくに **Junior Sunshine** においては「読むこと」「書くこと」の基礎を徹底して養成する方針が見受けられる。学習面での小中接続を確かなものとするため、**Junior Sunshine** ではテキストの後半に「文字に慣れよう」というセクションが設けられている。音と文字の関係に加えて、英語を書くときの注意点など、基本的なルールが少しずつ学習できるように工夫されている。「文字に慣れよう」は大文字・小文字を書くことから始め、最終的には単語を読み、ゲームで定着させるという展開になっている。中学入学後のつまずきの大きな原因のひとつは、読むこと書くことの負担である。これを克服するのに小学校の段階で文字の読み書きを学ばせることが重要であるが、その際の指導方法、評価方法などは今後の課題であると言えよう。

まとめ

内容の豊かな英語科の教科書が作成され、令和2年度より学校で使用されて、いよいよ小学校でも本格的に子どもたちの英語力の養成を進めるという段階に入った。とは言え、結果が出るのは、実際には少なくとも数年後のことになるだろう。新年度を間近に控えた現段階においても、新たな教科書を使った授業の運営をどのような体制で行っていくのか、授業を担当する個々の小学校教諭がいつどのように詳細な指導計画を整えるのか、不安が解消されない現場は多いことであろう。この時期になってもなお、教科書や教材を個々の教師が十分に使いこなせる状況ではないという声も聞く。教科化初年度の課題は山積していると言えるだろう。明らかに教科書中の語彙・表現のレベルはかなり高く、教える側も教えられる側も容易には成果を上げられないことが推測される。具体的には、初めての教科書だからこそ、音声教材の力を借りて、音重視の教育を心がけ、繰り返しによって定着を図ることが望ましいだろう。音声教材を家庭で使用させることでさらなる効果が見込まれる。小学校英語教育の最良の結果を出すためには、教師があせらずに時間をかけて丁寧に課題に取り組める環境が用意されるべきであろう。

